豆電燈付觀測用鉛筆

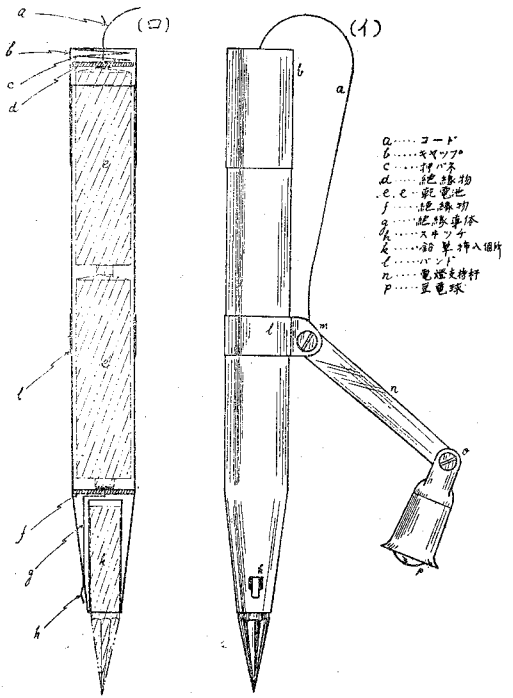
淺野英之助

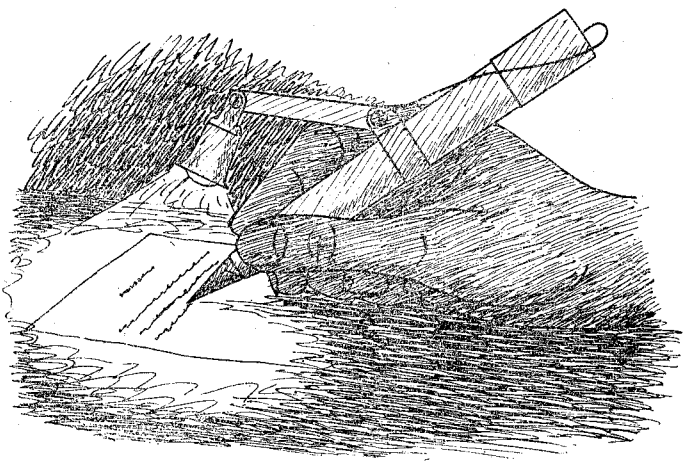
夜間の一般天體觀測に際して，觀測事項及びスケツチ等を記錄するには，懷中電燈を以つて手元を照明するのが一般である．遊星，月等の場合は，望遠鏡其他の器物に，電燈を懸けてをくといふことも出來るであらうが，流星，黃道光等特に野外に於て觀測する場合には，星圖，用紙，鉛筆及び電燈を，同時に使用せんとして，甚だ困難されることを多くの諸氏は經驗せられてゐることゝ思ふ．本器はこの困難不便を除かんとして考案されたものである．

着想は小生自身に出でたものではない．岐阜の廣瀨氏のお話に據れば「鉛筆の先に豆球を付けて，照明にして觀測してはと云ふ話を最初に聞いたのは，第一回黃道光會議が，石山で開かれた折，會議後，坂元さん，山田さんと花山に當時居られた亀井さんと私と四人，花山道路をくらやみの夜，京都の街へ下りる時，坂元さんかゞ之んなことを申され，亀井さんが會議の席上で話が出ると面白かつたでせうと申されたのを覺えてゐます」とあり坂元氏の着想らしく，その翌年(1933)11月の Leonids の時に，山田氏の鉛筆に直接腕を付けて，その先に豆電球を取付けたものを使用されてゐて，小生もこれは便利だと其折初めて知つたのであつた．併し單に鉛筆にくゝり付けた程度のものであり，乾電池は懷に入れるこめにコード長く，相當面倒な原始的なものであつた．そのまゝ以後數年間忘れ去つてゐたのであつたが，本年3月福山市に於て，第3回黃道光會議が開催せられた席上，本田氏が胸に電燈を縛り付けて黃道光を觀測せられると云ふ苦心談があり，小生より上述の照明付觀測用鉛筆のことを話したところ，山本先生が「パテントを取つたらどうだ」といつた樣な御冗談を仰せられたのであつた．併し，確かに便利であると思つたので，最近少し工夫して便利な形にまとめ，試作してみたのが圖に示す如きものとなつたのである．

説明：――簡單であるから圖を御覽になれば直ちに御了解になると思ふが，少し説明すれば，(a)は1本の絶緣コード．キヤツプ(b)を取去れば棒狀の小型乾電池(e, e′)――これは「ナショナル」「アサヒ」等の製品で普通にペビライト用乾電池として販賣されてゐる――が挿入せられ，鉛筆は(k)の部

分へ差込むのである．(n)はアルミニユーム製扁平中空になつてをり，その中を絶縁コード(a)が通つて豆球ソケツトの一方の極に接續されてゐる．回路の一方は，ケース自體が總金屬製であるからこれを利用し，その回路中(h)に於て開閉する．バンド(l)は適當に締付けられてをり，自由に移動せられ，又(n)は(m)を中心として廻轉し，電球ソケツトは(o)を中心する故に，高低遠近任意の位置に電球を止めて，鉛筆先の照明を，廣狹强弱意のまゝになすことができる．(h)の押スキツチに食指を當てゝ自然に持てば，そのまゝ點燈せられ暗中に自在に書く事が出來，不用消燈には輕く食指を浮かすのみでよいのである．即ち鉛筆を持ちたるまゝにて，點滅





〔第101頁へ〕

極大は恐らく16日朝に起つたものであらう.

× × ×

昨年7月及8月の觀測集計は下表の通りである(12月6日記)

觀測者, 觀測地及觀測數 (1937年7月及8月)

觀測者	觀測地	7月			8月		
		回數	時間數	流星數	回數	時間數	流星數
小槇和枝	和歌山縣金屋	2	180	10			
實方雅雄	京城府	3	365	56	3	345	66
小槇孝二郎	和歌山縣金屋	7	460	62	9	720	225
小槇茂代	和歌山縣金屋	2	180	20			
吉井耕一	廣島縣竹原				7	715	240
堀田泰生	横濱市				2	215	79

遊星面課月報 (11月)

木星はもう觀測の好機ではなくなつたが, 火星の様に視直徑の縮少が速かでないから未だ12月一杯は見える. 冬期に入ると例年の様に目立つてシーイングが悪くなるから, 遊星面の觀察の様な精緻な仕事に適しない. 今月に入つて木星のスケツチは青木章氏から8枚, 宗田順二氏から2枚受取つた. 共に器械の口徑が小さいので木星面の詳細は認めてをられないが兩スケツチから觀て, 縞の太さ位置には變化は無い模様である.

火星觀測の記錄は目下幹事の手で整理中, 逐次天界に發表しますから詳細の記事の方に讓ります. (E. D)

〔第96頁より〕

自在些の手數も要しない. 全體は稍大形の萬年筆程度であり, 特に持重りがするといふ程のことはなく, 充分輕快に使用できる. 乾電池, 豆電球, 鉛筆は總て普通に得られるから, 消耗品の補給は容易である.

尙, 本器は特に吾々のみならず, 廣く一般社會の夜間活動者に利便を與えることも, 相當あらうかと思はれる. 各方面に利用されることを願つてゐる.

(1937. ix)